麗澤大学シンポジウム（2015．02．21）

新世界秩序への動きーー
ウクライナ危機で見え始めた
新たな世界秩序

石郷岡　建

ウクライナで何が起きたのか？

①ウクライナの政変騒ぎ

⇒ウクライナ国内の東西対立問題 （歴史観）

②クリミア半島のロシアへの編入

⇒民族自決か？領土保全か？ （国際法の解釈）

③ロシアと欧米の対立

⇒新たな冷戦か？ ロシアの孤立か？ （ロシア論）

④世界秩序の行方（G8の時代は終わったか？）

⇒文明の対立？ 歴史の終わり？ （国際政治）

⑤日本の立ち位置

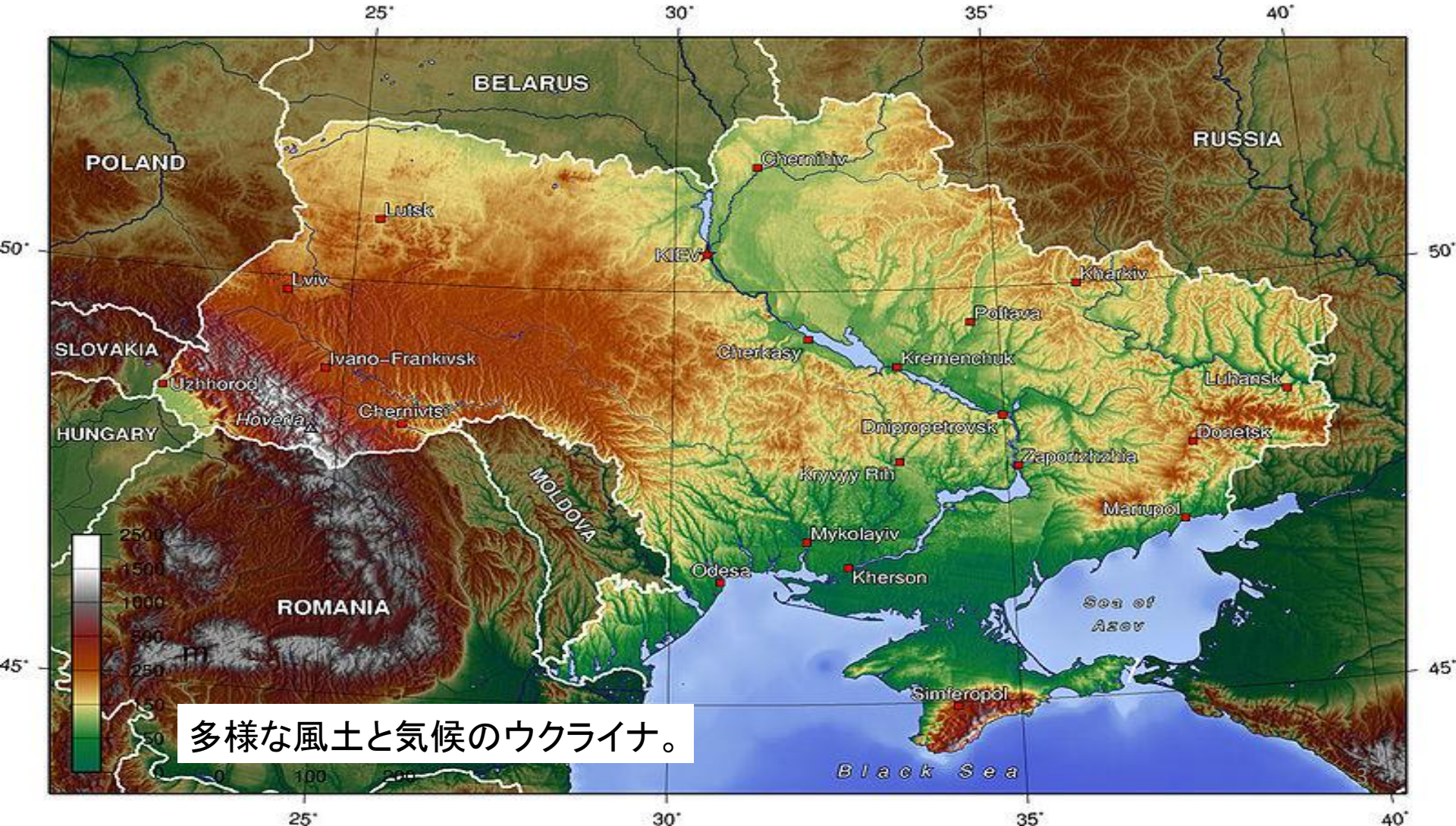
（中露接近を積極的に阻止をすべきか？）

⇒米国依存か？ 独自外交か？ ⇒（日本戦略）

それぞれが長い議論と思考転換を求められる。

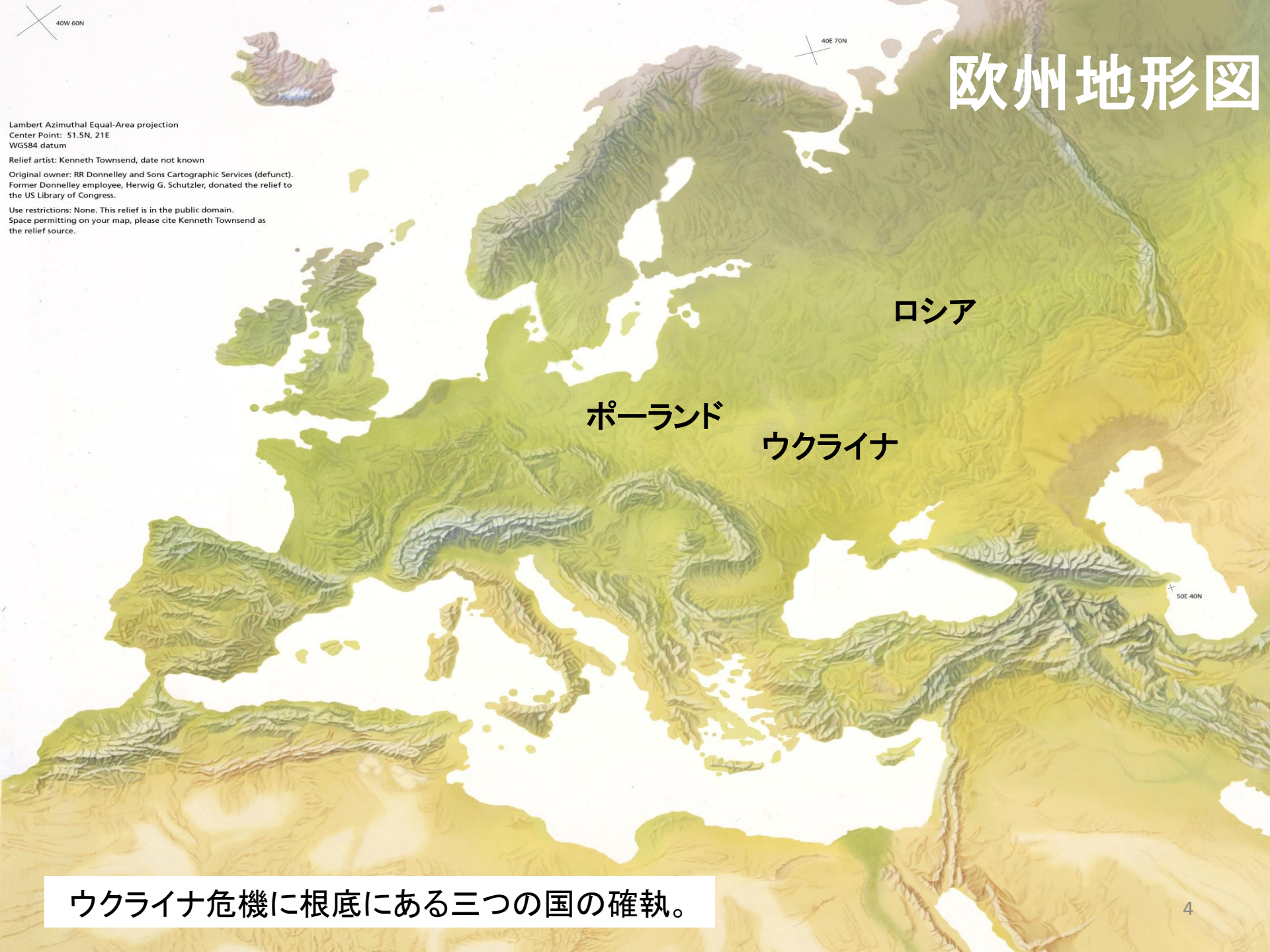
ドニエプル川を中心とするクライナ地形図

西＝カルパチア山脈、東＝ロシア森林地帯、
北＝森林と沼沢地、南＝ステップと黒海、



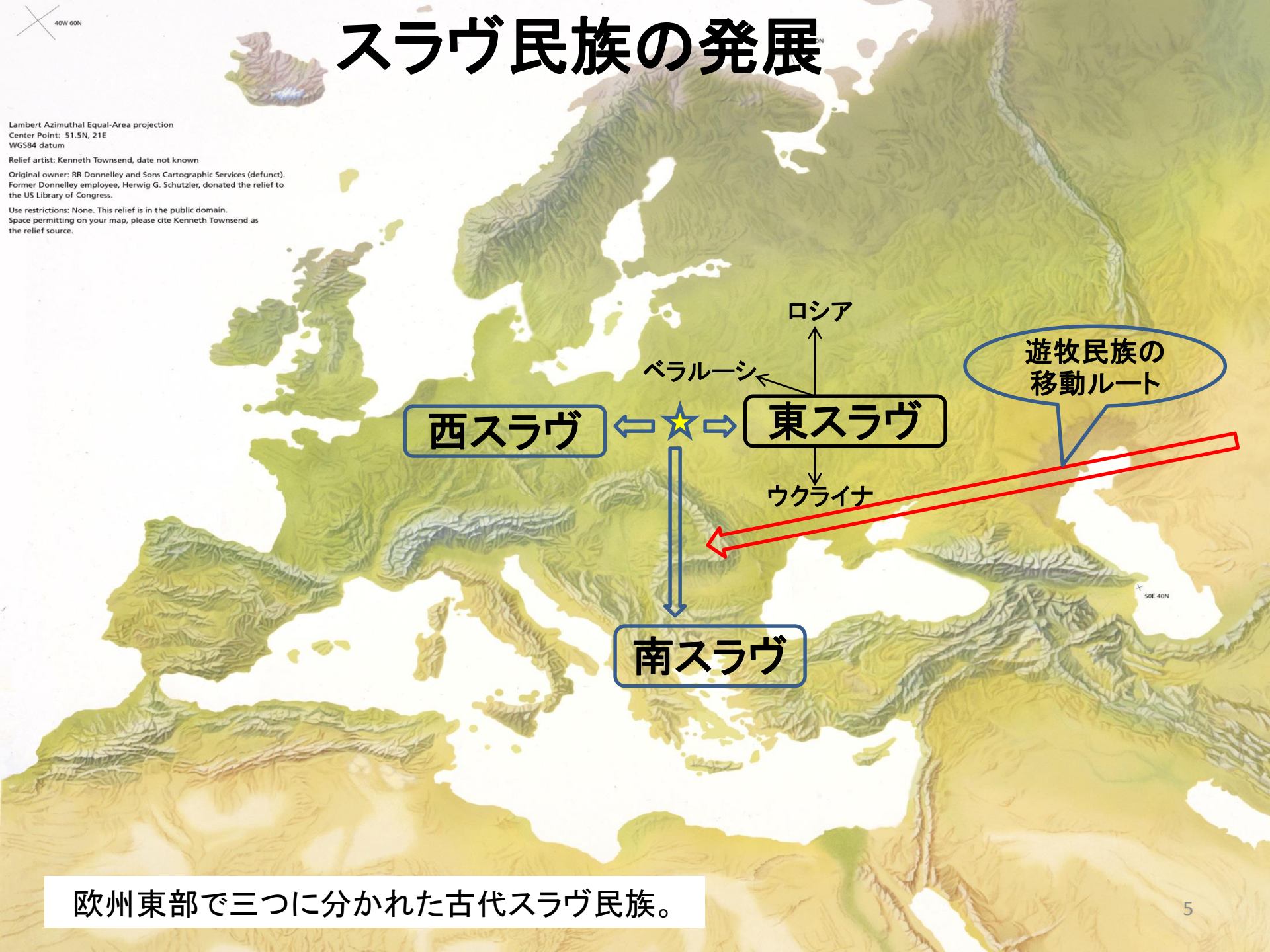
多様な風土と気候のウクライナ。

欧州地形図



ウクライナ危機に根底にある三つの国の確執。

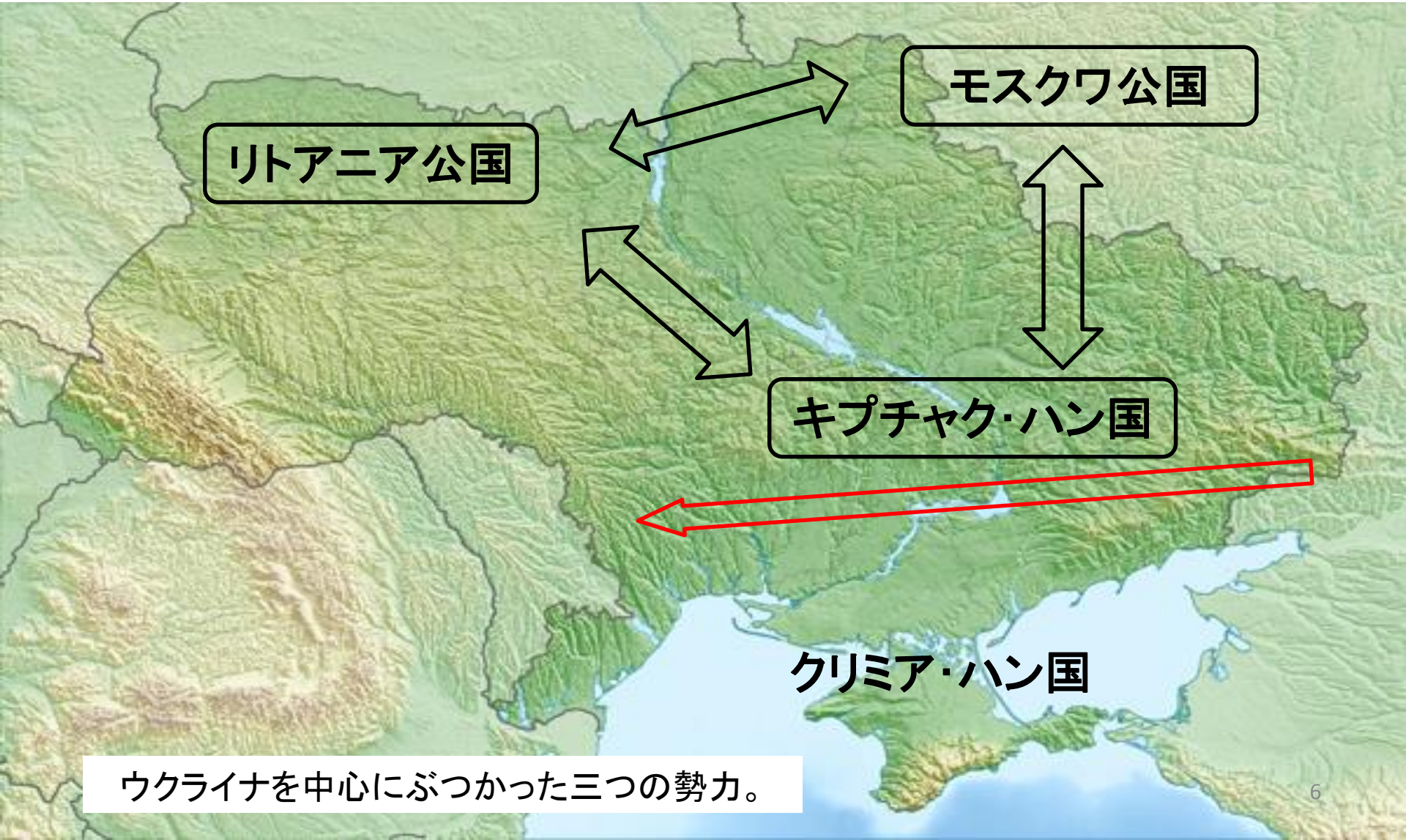
スラヴ民族の発展



欧州東部で三つに分かれた古代スラヴ民族。

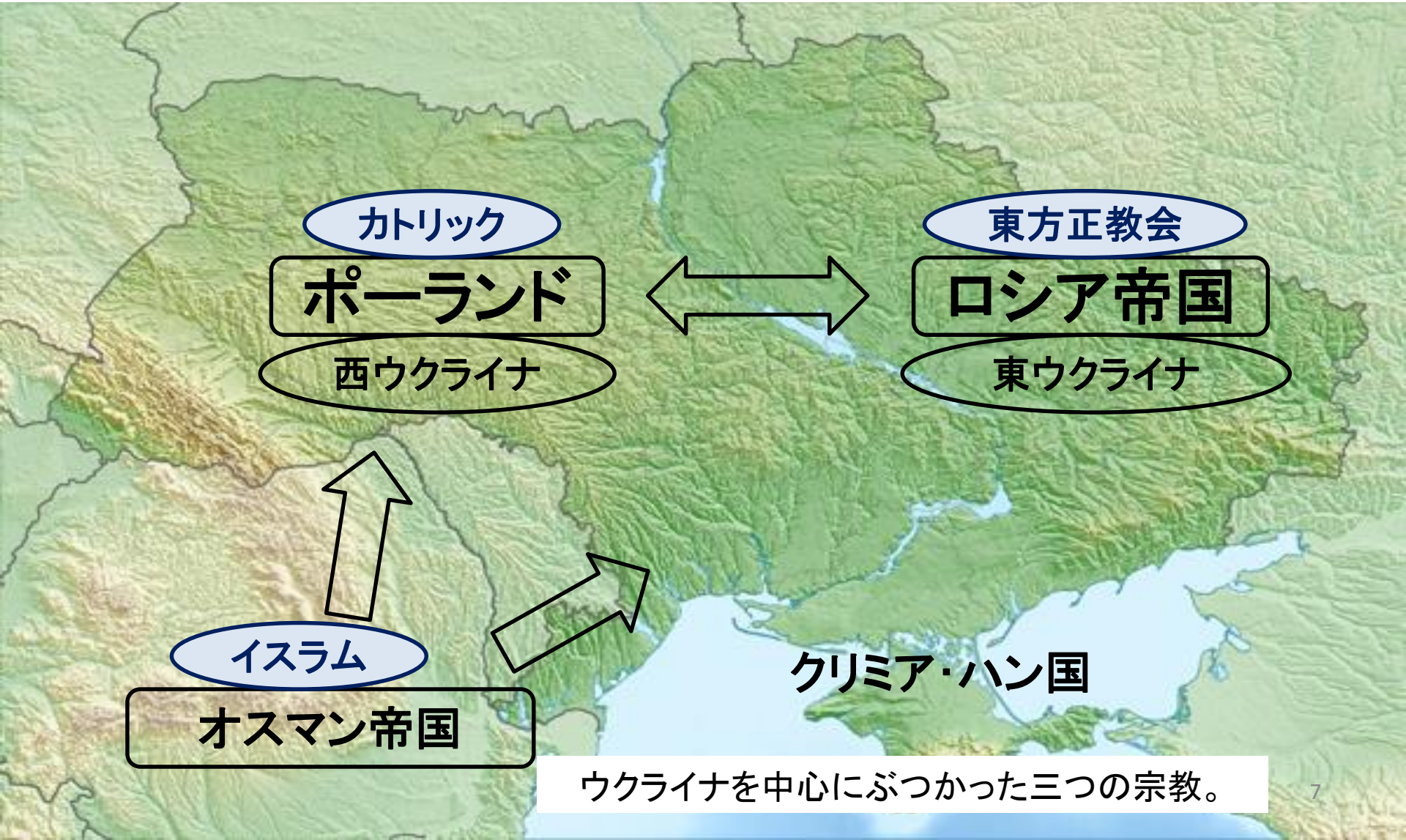
モンゴル・タタール来襲

―13世紀～14世紀のウクライナ



ウクライナを中心にぶつかった三つの勢力。

ロシアとポーランドの東西対立
―13世紀～18世紀のウクライナ

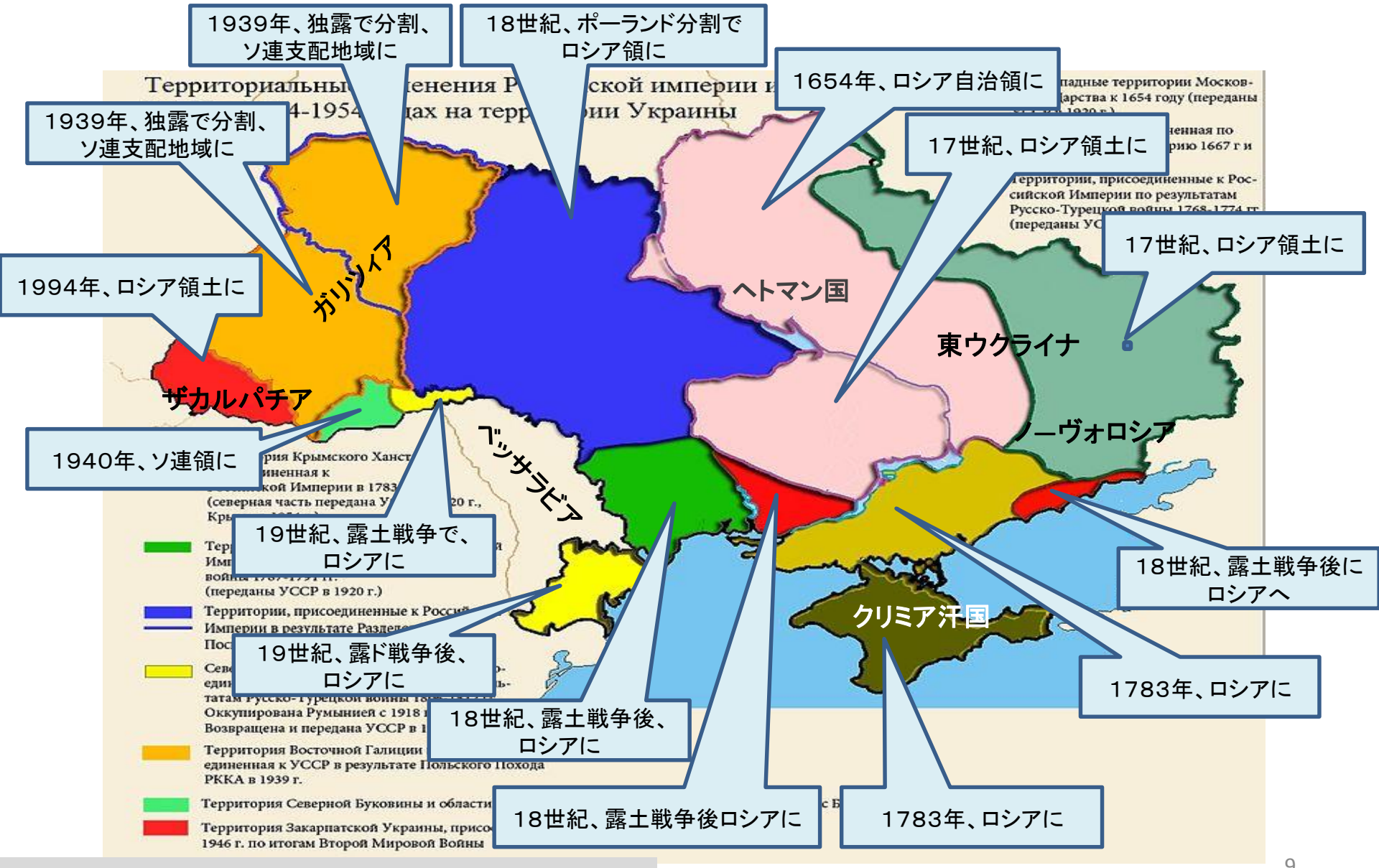


ウクライナを中心にぶつかった三つの宗教。

東ウクライナのコサック（絵画・レーピン）
—「トルコのスルタンに手紙を書くザポロージュのコサック」

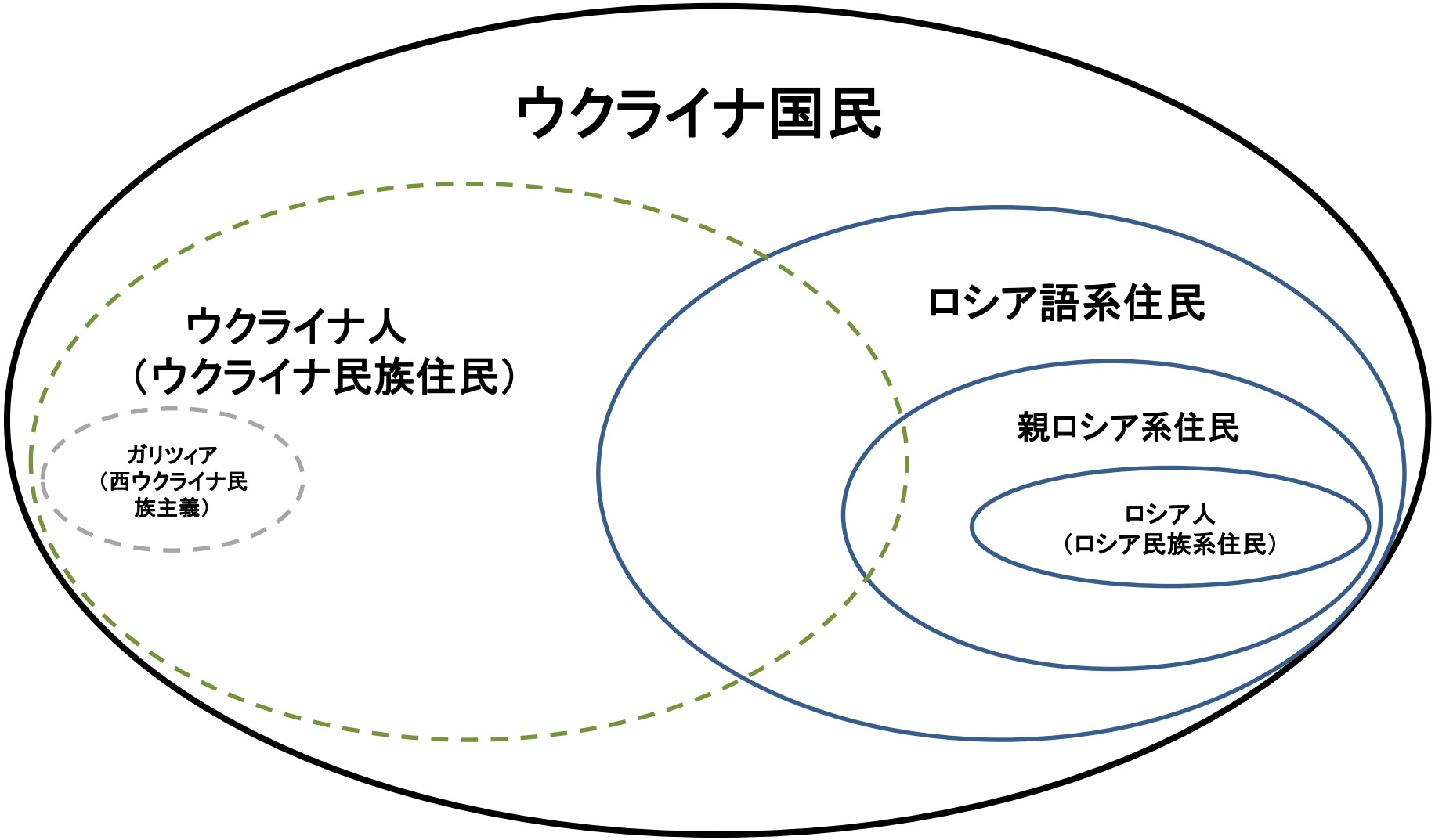
ウクライナの根底に隠れている遊牧民族気質。

ウクライナの領土変遷



ウクライナの複雑な歴史と統一の難しさ。

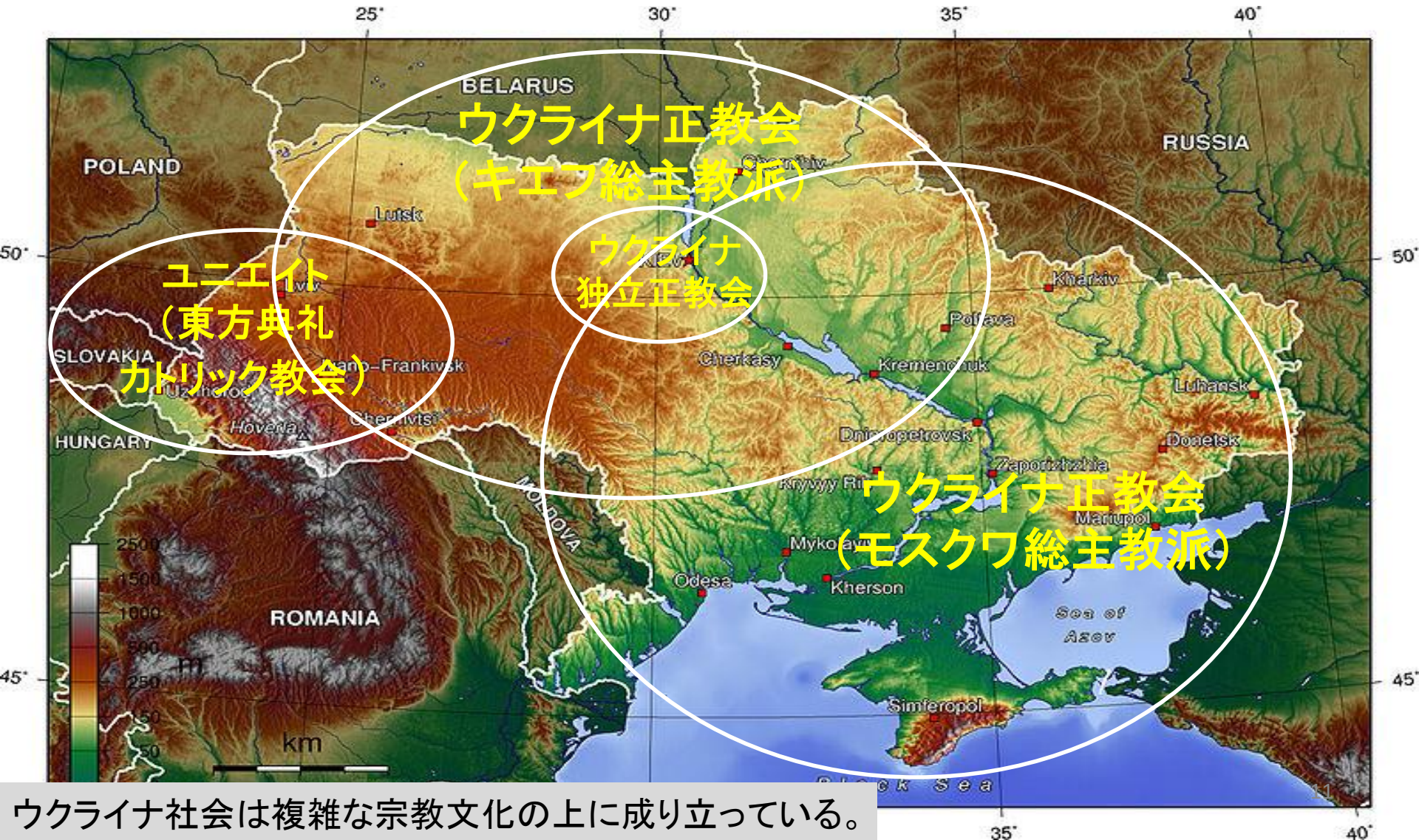
ウクライナのロシア系住民とは何か？



ウクライナ社会は複雑な住民構成の上に成り立っている。

ウクライナ宗教分布図

東＝モスクワ正教会、中央＝キエフ正教会、西＝ユニエイト



ウクライナ社会は複雑な宗教文化の上に成り立っている。

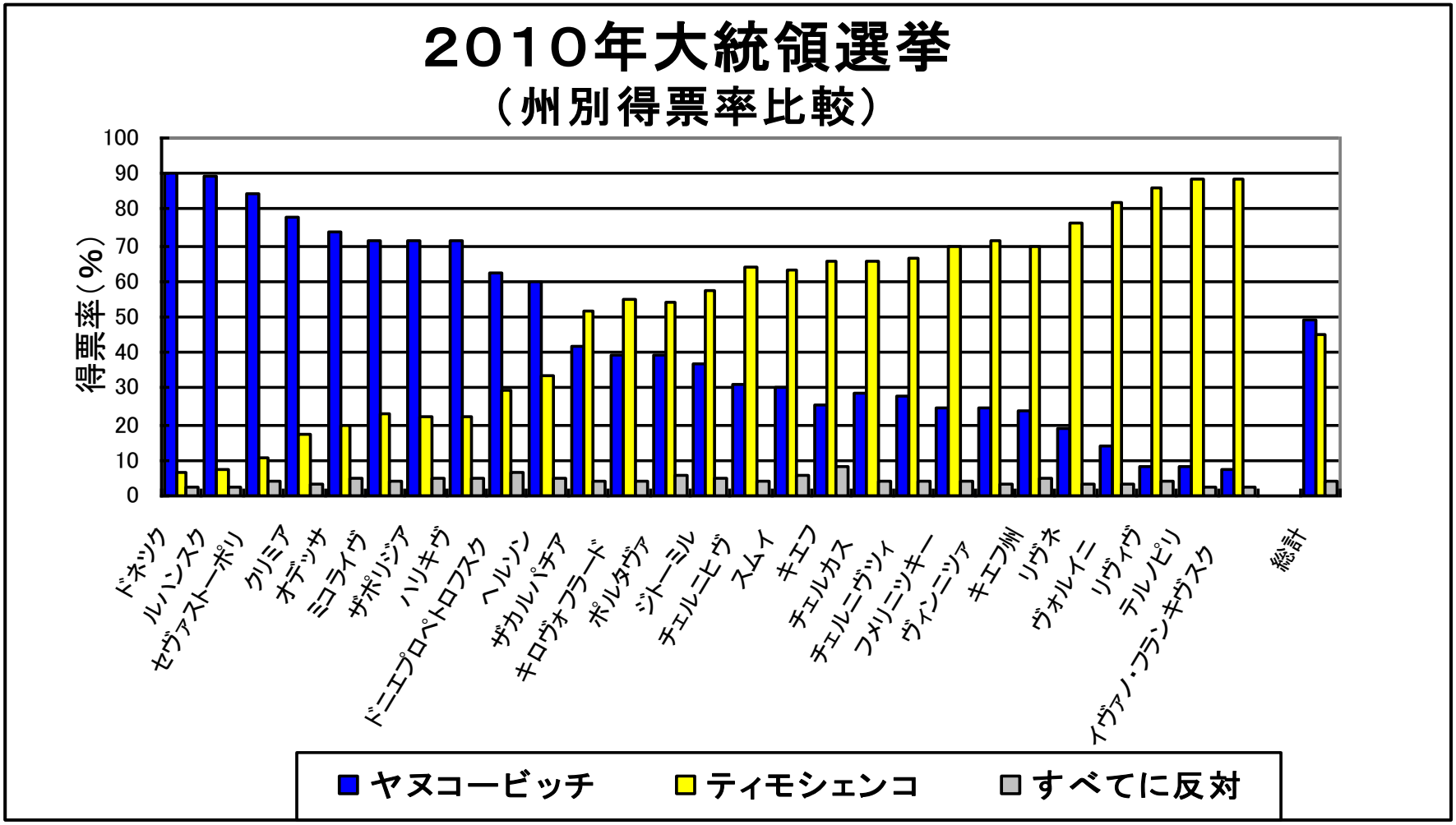
ソ連崩壊後のウクライナの政治状況

―24州2都市（キエフ・セヴァスーポリ）

ウクライナ社会の政治状況はもっと複雑だ。

2010年大統領決選投票結果

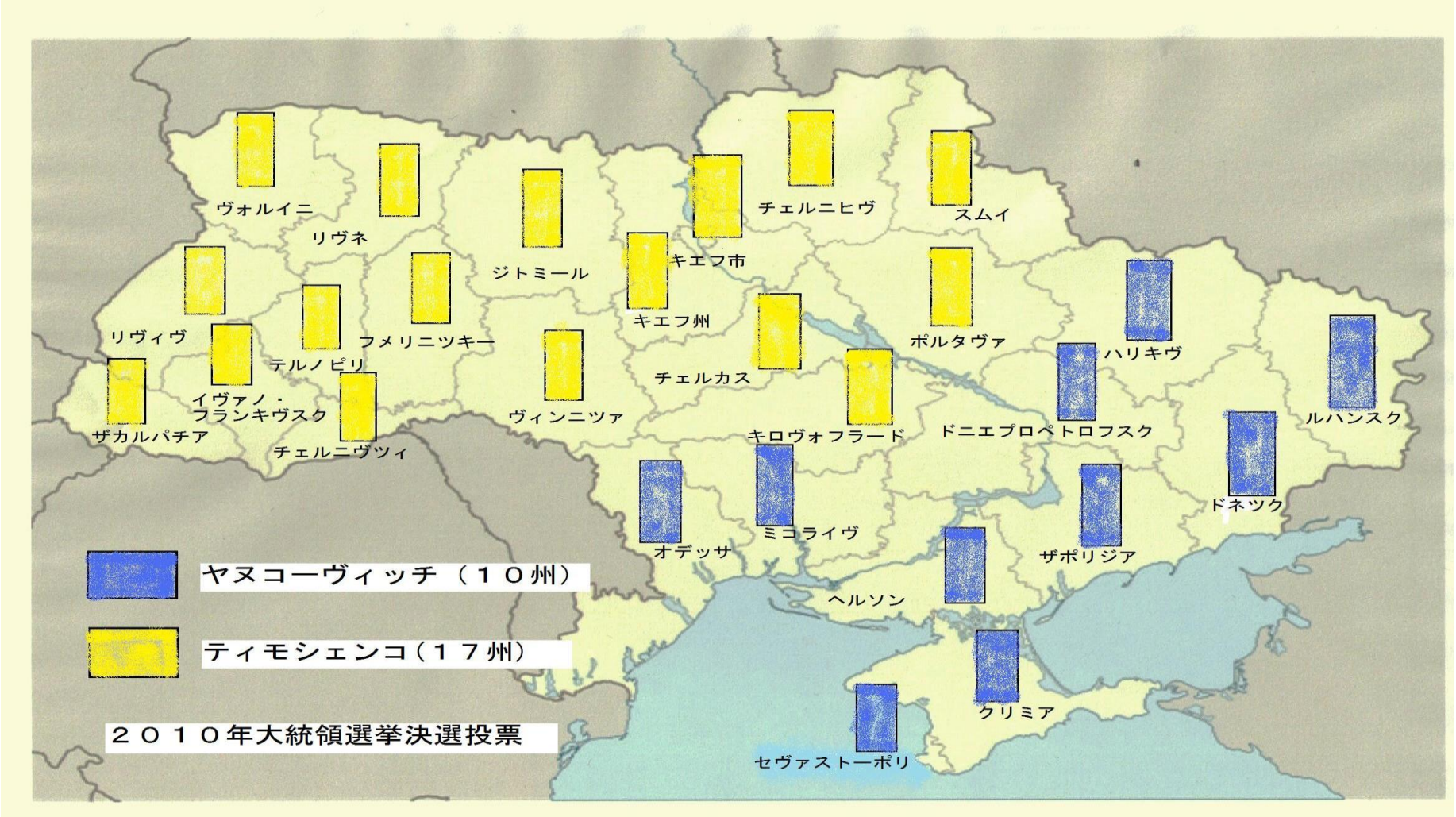
東西二人の対決は東から西へくっきりと投票結果に表れる



東西きれいに分かれるウクライナ選挙の得票率。

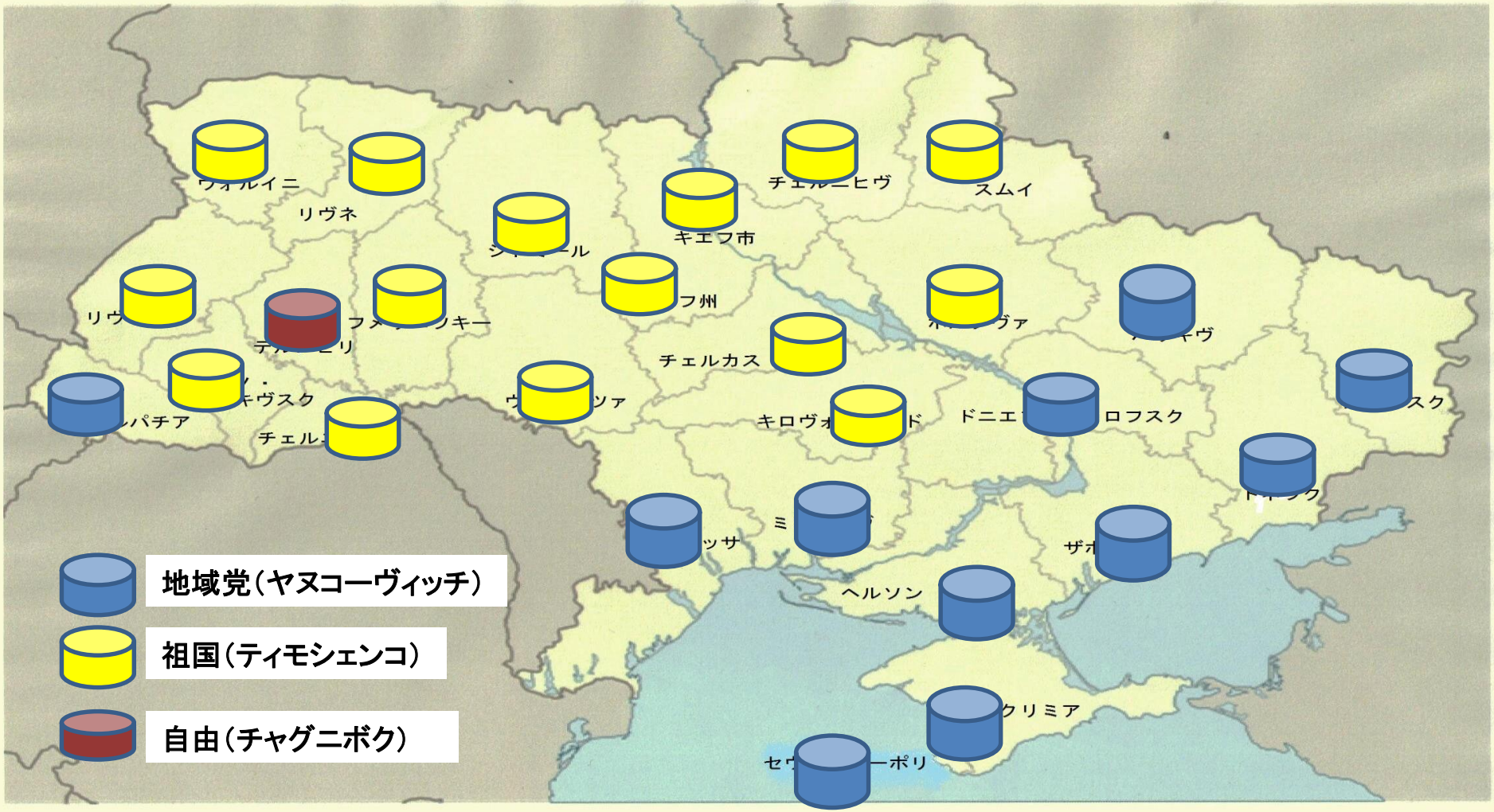
2010年決選選挙得票図

西ウクライナ13州VS東ウクライナ10州――東西対立の典型



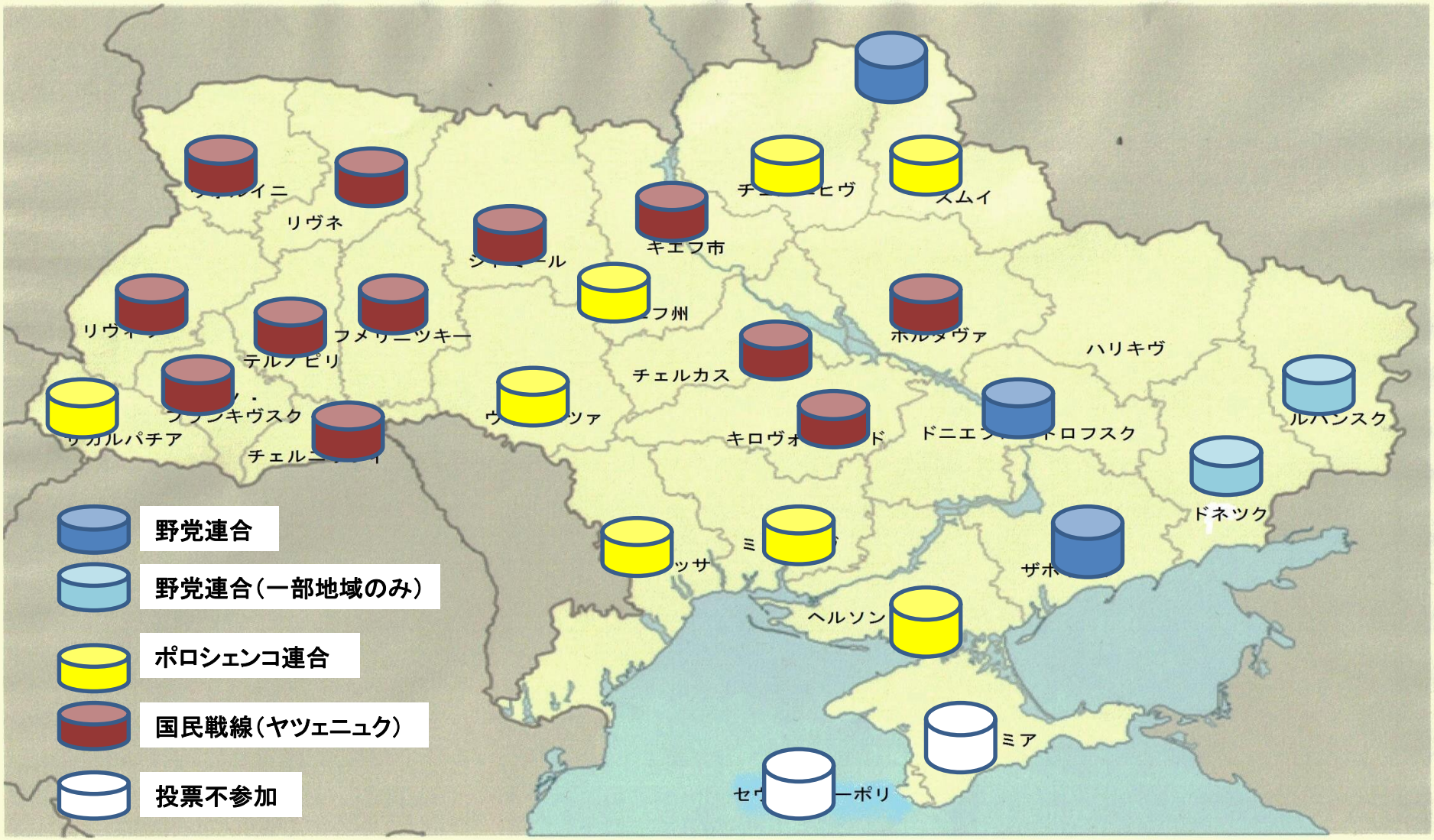
大統領選挙の得票率は東と西できれいに分かれる。

2012年議会選挙投票結果
（州別トップ政党図）



議会選挙の得票率も、東と西できれいに分かれる。

2014年議会選挙投票結果
（州別トップ政党図）



ウクライナ危機後の議会選挙でも東西対立の構図は決して崩れていない。

米国マトロック元駐露大使の言葉
―ウクライナとは、何か？　その基本情報。

☆ソ連崩壊後の独立22年が過ぎたが、いまだに、ウクライナのアイデンティティを作り上げ、国民をまとめる指導者がでていない。

☆ウクライナは国家形成をしているが、まだ、国民形成はできていない

⇒（Ukraine is a state but yet a nation）

①現在のウクライナ領は第二次大戦後、外部の者によって作られた。

②ウクライナの住民は異なる言語、歴史経験を持ち、はっきりした境界線はない。

③ロシアとの友好的な関係抜きに、繁栄した健全な統一国家には決してなれない。

④ロシアは、ウクライナの北大西洋条約機構（NATO）加盟の阻止に関しては何でもすると何度も警告をしている。

⑤ロシアは下記の三つの条件を満たすならば、ウクライナが欧州同盟と協力して政治経済システムを近代化することに反対はしない。

❶反ロシアを基本とする国家を作らない。

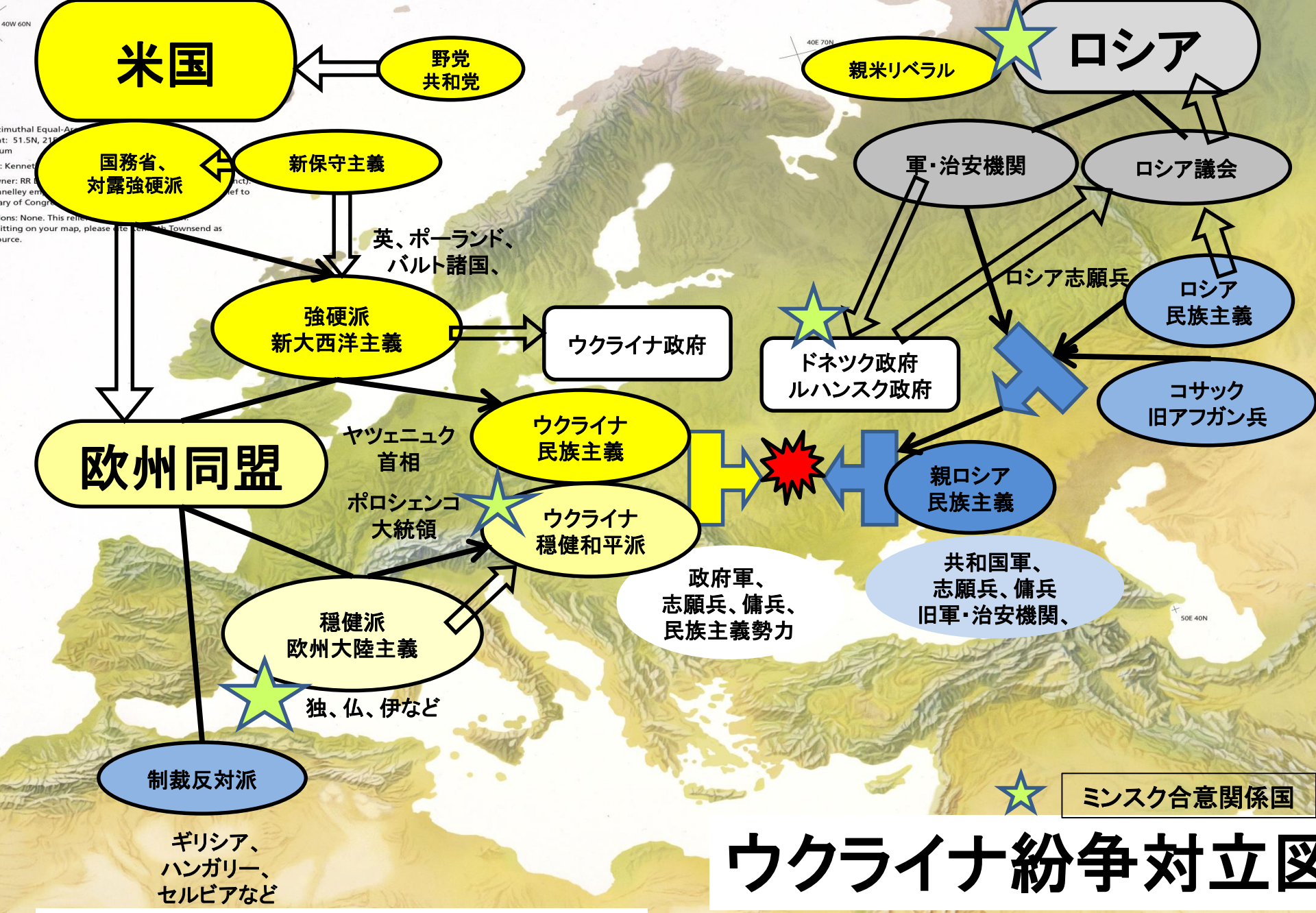
❷ロシア系住民は社会・文化・言語に関し、他の住民と同等の権利を持たせる。

❸段階的な欧州への統合はウクライナのNATO加盟を意味するものではない。

⑥今のところ、ウクライナの過激な民族主義者たちは三つの条件を受け入れる気持ちはない。

そして、米国は、ロシアの呪いの対象となっている過激派を多目にみるか、または、奨励する政策をとっている。不公平かもしれないが、これが現実だ。

結局、ウクライナは国家統一が不十分で、西欧型近代国家とは言えない。

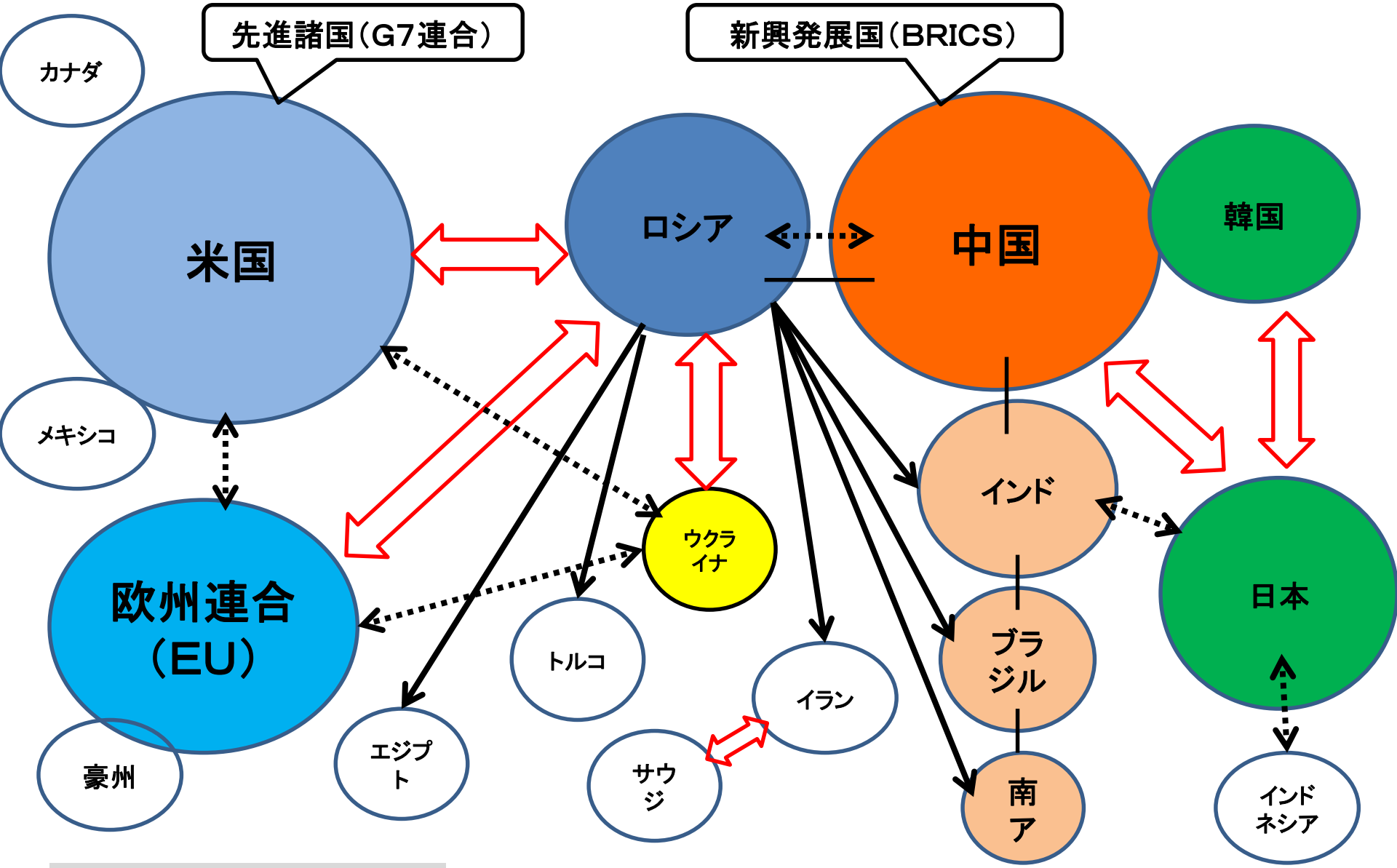


ウクライナ危機は単純な構図ではない。

東ウクライナ内戦
ミンスク停戦合意直前状況
デバリツェヴォの包囲戦

ミンスク合意の停戦実施は難しい。
戦争終結には東西の和解が必要だ。

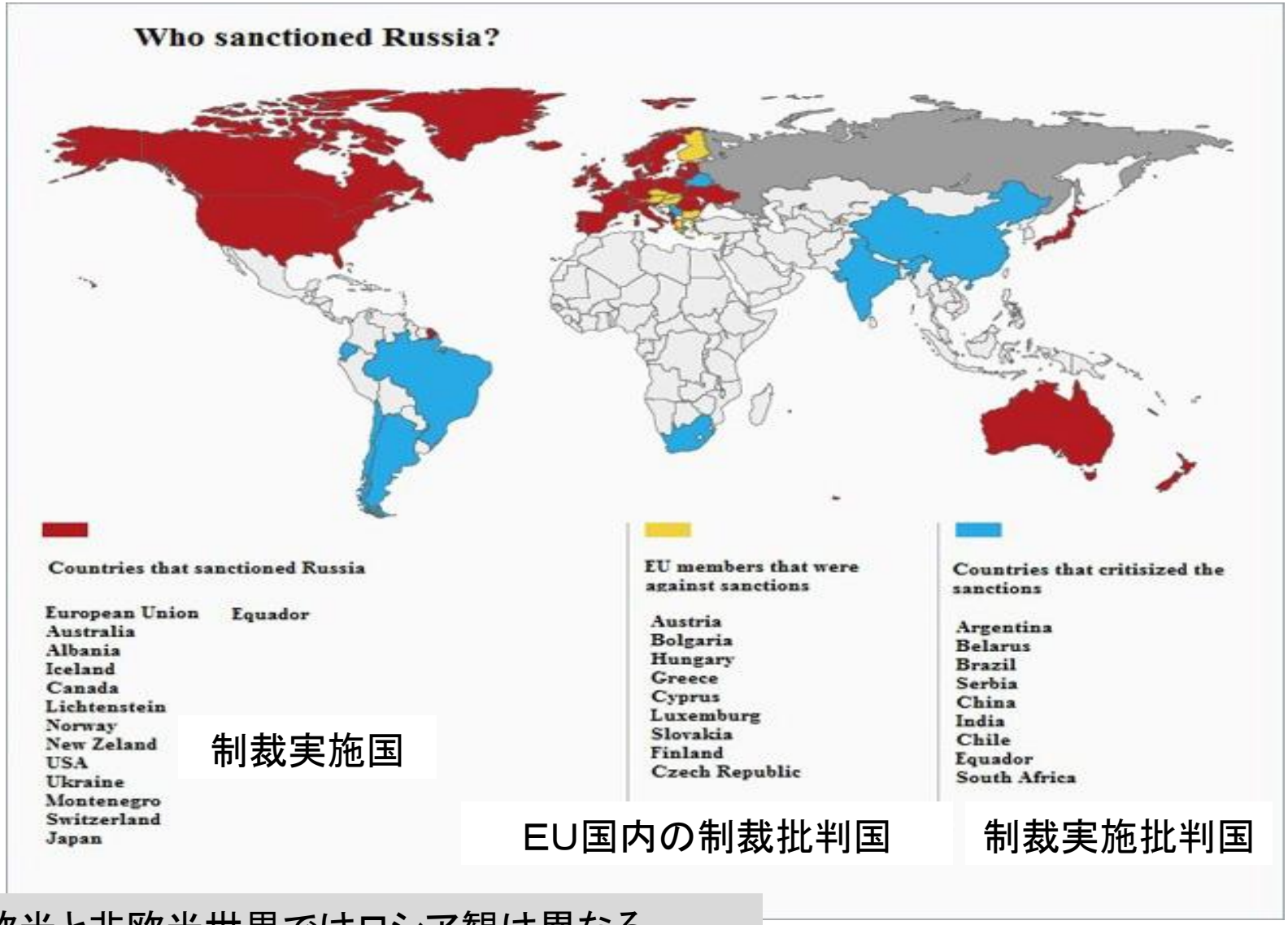
ウクライナ危機をめぐる国際情勢



ロシアの地位は微妙だ。

対露制裁実施国

大半は欧米先進国で、アジアでは日本だけ！



欧米と非欧米世界ではロシア観は異なる。

プーチン大統領の対ウクライナ戦略

◎将来のウクライナ国家

ーウクライナは東西統一を維持できるのか？　それとも分裂するのか？

ーウクライナは欧州の一部になるのか、それとも欧州の枠外で、ロシアとの協力関係を維持するのか？

ーそれとも、ウクライナは、欧州にもロシアにも距離をとった独立・中立の立場をとるのか？

◎ロシアにとって、もっともよい選択は何か？許せる範囲はどこか？

①ウクライナは東西対立を克服し、同じスラブ民族としての**協力・同盟関係**を維持する。◎

②ウクライナは統一を維持しながら、欧州とロシアの**中間的・中立的な地位**を維持する。◎

③ウクライナは統一を維持し、欧州との関係を強化し、**欧州同盟に加盟**する。
　しかし、NATOには、加盟しない。　○

④ウクライナは**分裂**し、西ウクライナは親欧州、東ウクライナは親露の路線対決となる。▽

⑤ウクライナは西ウクライナが東ウクライナの抵抗を抑え、統一を維持し、
　NATOに加盟し、**ロシアとの対決路線**をとる。　X

◎ロシアとの欧州の境（ウクライナのどこに分離線が引かれるか？）

①現ウクライナの西部国境

（ロシアはウクライナ全域を勢力下に置き、NATOの東方進出を阻止する）

②ウクライナ中央を流れるドニエプル川

（ウクライナは東西分裂し、ロシアは東ウクライナを支配、もしくは勢力下に置く）

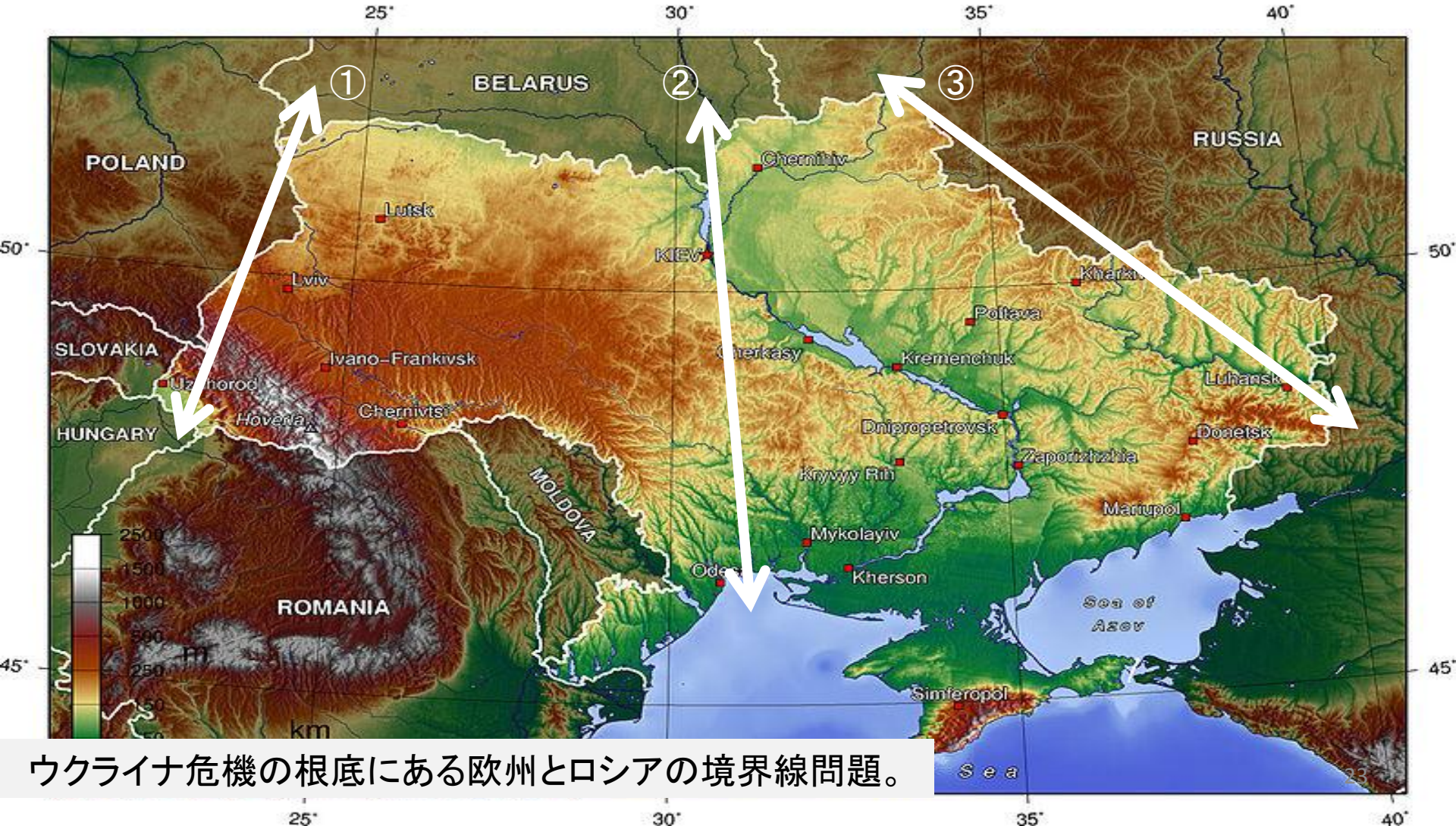
③現ウクライナの東部国境

（ロシアは全ウクライナが欧州の影響下入ることを認め、東ウクライナ国境で欧州と対決）

⇒ロシアと欧州の境の選択は、ロシアの戦略的立場を決定的に決める

ウクライナとは何か？　プーチン大統領の回答は出ていない。

欧州とロシアの境はどこか？
―ウクライナの西（①）、中央（②）、東（③）？



ウクライナ危機の根底にある欧州とロシアの境界線問題。

プーチンは、何を考えているのか？

―第三期大統領就任後の大きな思想転換。

- 「冷戦以後、想定された一極世界は成り立たなかった」

（2007年2月、ミュヘン安保会議演説）

- 「世界が今日、直面していることは、深刻な制度危機であり、グローバルな再編成だ」（2012年1月、大統領選前の論文）
- 「ソ連崩壊20年間に築かれたシステム（一極）は終わり、今日“従来の極”（米）はグローバルな安定を維持する能力がなく、“新しい中心”（中）は、その用意がない」（同）
- 「近い将来、決定的な年になる。事実上、全世界の分岐点となり、根本的な変化の時代に突入するか、震撼とする時代となるかもしれない」

（2012年12月、大統領教書演説）

- 「21世紀のロシアの発展のベクトルは東方への発展だ」（同）
- 「われわれは世界的、地域的超大国の地位を求めない。ただ、リーダーの仲間に入ることは目指す」（2013年12月、大統領教書演説）

プーチンの世界観の根底にある多極化世界到来論。

プーチンの発言の背景
―クリミア半島編入決定の裏にある思想。

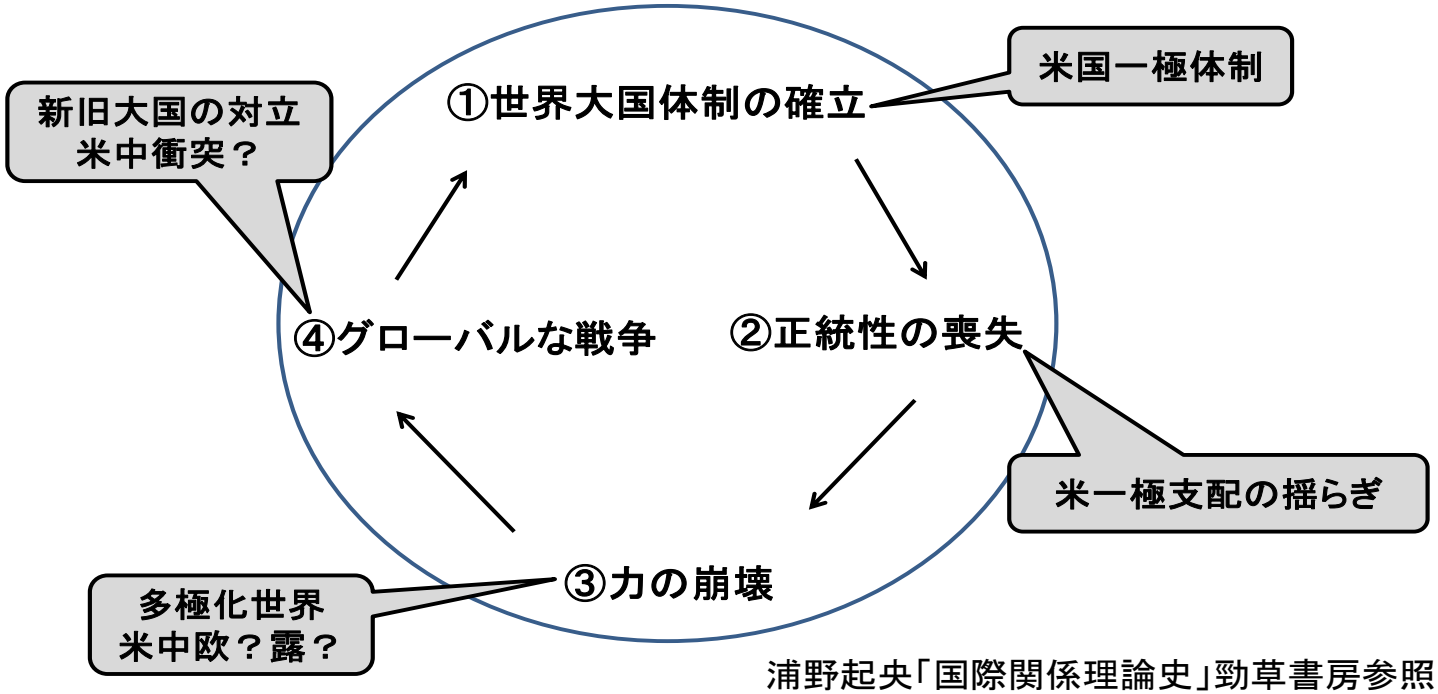
- **米一極世界は来なかったし、もう来ないと考える。**
  - →米国の力の後退→G7の後退→G20の時代→G8脱退も辞せず。
  - →中国の台頭への懸念と対処の必要性。
- **ロシアは欧米と価値観が一致せず、別の道を歩む。**
  - →グローバルな価値観の否定→「米例外主義」の否定。
  - →欧米普遍的価値観の否定。
  - →ユーラシア地政学的価値観の主張。
- **近い将来、世界に大きな変化が起きると考える。**
  - →多極化世界→多極間の紛争のひん発。
  - →不安定な時代の到来。
- **ロシアは東へとシフトすべきだと考える。**
  - →ユーラシア主義の主張→アジアへの傾倒。
  - →極東シベリア開発の主張。

世界に大きな変化がやってくる。そして、次はアジアだという思想。

プーチン大統領の多極化世界論の背景

世界システム（覇権国交代）論

循環運動としての長期サイクル（モデレフスキ）



浦野起央「国際関係理論史」勁草書房参照

21世紀の覇権国は再び米国か、それとも中国か？

さまざまな多極化世界

- **無極世界**＝世界をリードする国はいない。
- **2極世界**＝米ソの冷戦対立時代。将来の米中2極並立・対立時代？
- **4極世界＝**米国、中国、欧州（欧州同盟）、日本の4勢力の時代？
- **5極世界**＝国連安全保障理事会常任理事国（P5）支配の世界
- （旧連合国支配世界）。
  :P5＝米英仏露中の核兵器保有五大国のいわゆる核クラブ。
- **7極世界**＝G7（先進諸国首脳会議）
  ＝米英仏＋独伊日加（中露は入らない）。
- **8極世界**＝G8（主要国首脳会議）
  ＝米英仏＋独伊日加＋露（中国抜き）。
- **（9＋α）極世界**＝米英仏露中＋日独印伯＋α
  ＝国連常任理事国改革案。
  *α＝（アフリカ一カ国＝ナイジェリアまたは南ア）
- **11極世界**＝（G4・独印ブラジル）案
  ＝国連安保理常任理事国11カ国案＝G5＋G4＋2
- **13極世界**＝G8＋G5（中国、インド、ブラジル、メキシコ、南アフリカ）
  ＝洞爺湖サミット・メンバー国。
- **20極世界（サミット20）**＝13極＋アルゼンチン、トルコ、韓国、豪州、
  サウジアラビア、インドネシア、EU（*）：　*（スペイン、オランダ？）

多極化世界の極とは何か？

2050年の世界

―ゴールドマン・サックス報告（2003年10月）

＜2004年の世界＞

①米国②日本③ドイツ④英国⑤フランス⑥イタリア

- 2041年：BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）4カ国の経済規模（GDP）はG6（米英仏独伊日）の規模を超える。
- 2042年：中国のGDPは米国を越えて世界一。
- 2050年：世界の6大経済国（G6）から欧州が消える。

＜2050年の世界＞

＊①中国②米国③インド④日本⑤ブラジル⑥ロシア

＊2050年の6大国の半分はユーラシア中央の国家。

21世紀後半は欧米からユーラシアへと世界の重心は移る？

世界GDPのトップ10（IMF、億ドル）

＜2005年＞

①米国	12兆4339
②日本	4兆5607
③独	2兆7962
④英国	2兆2463
⑤中国	2兆2437
⑥仏	2兆1375
⑦伊	1兆7794
⑧カナダ	1兆1355
⑨スペイン	1兆1317
⑩ブラジル	8818

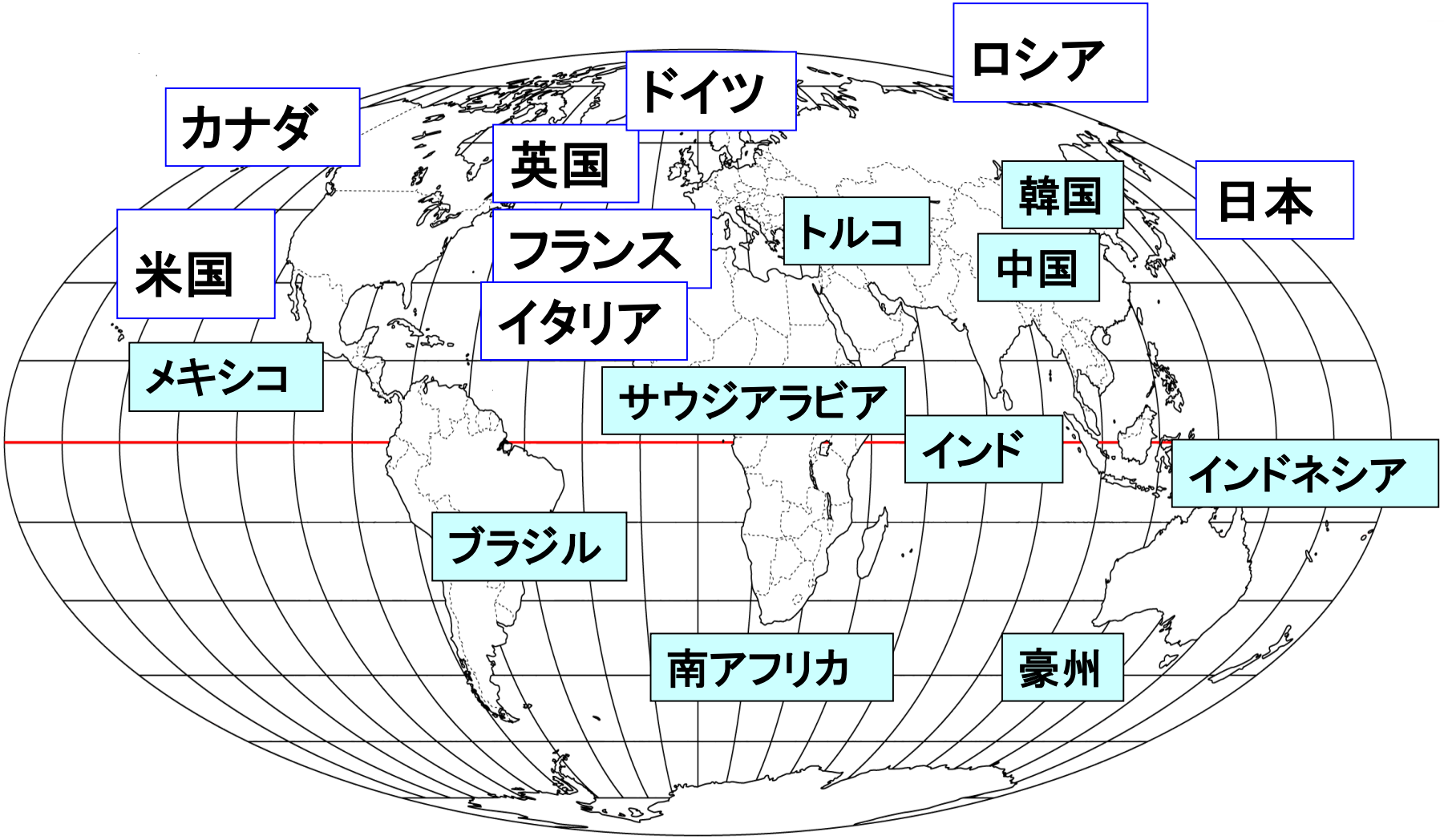
＜2012年＞

①米国	15兆6848
②中国 ↑	8兆2270
③日本	5兆9640
④独	3兆4006
⑤仏	2兆6087
⑥ブラジル ↑	2兆3960
⑦英	2兆4405
⑧露 ↑	2兆0220
⑨伊	2兆0141
⑩インド ↑	1兆8248

BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国）の成長は、どこまで続くのか？

G 20（G8＋G12）サミット体制

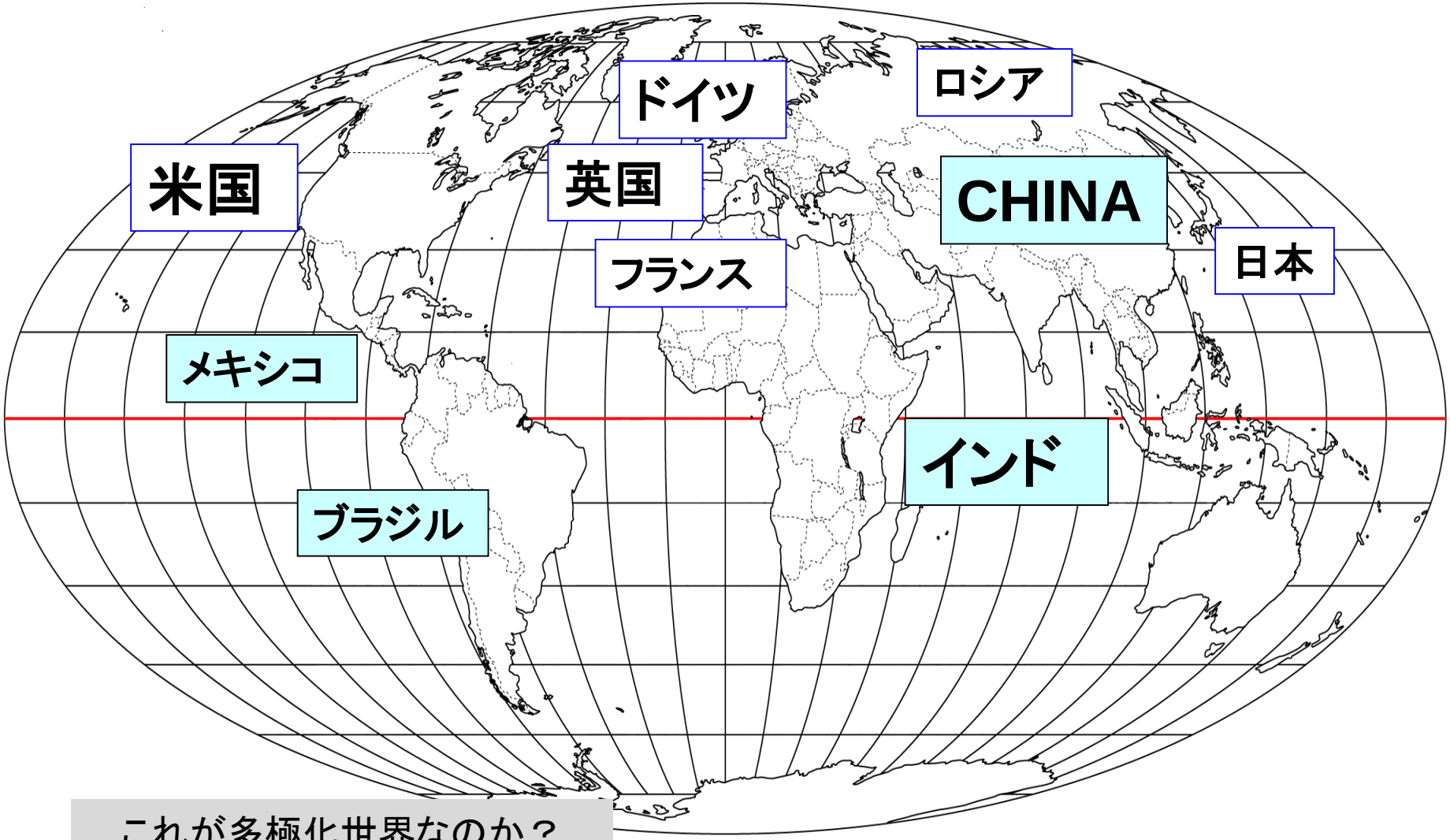
(経済的観点からの多極化体制?)



これが多極化世界なのか？

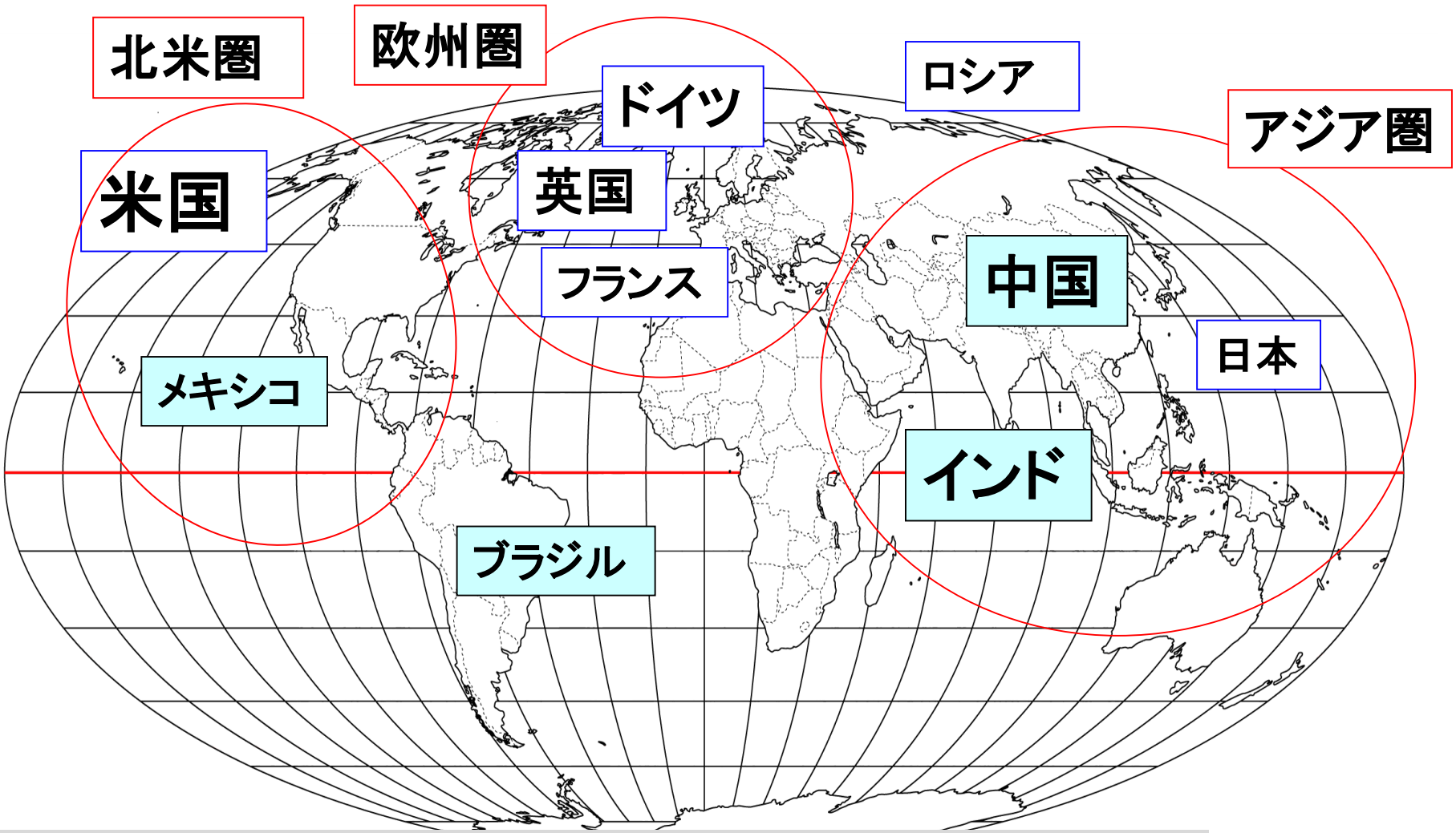
：G12新興諸国

2050年のメインプレイヤー予測?



これが多極化世界なのか？

多極世界を決めるのは
経済統合圏ではないか？



これが多極化世界なのか？　そして、ロシアはどこに属するのだろうか？

カラガーノフの主張

ー高級経済学院教授（2014年4月8日付けイズヴェスチヤ紙）

- 「ロシア、この四半世紀押し付けられてきたゲームの原則を変えようとしている」
- 「非西側圏を代表して冷戦後積み上げられてきた問題に挑戦する」
- 「変化は1990年代、アジアの台頭とともに現れていた」
- 「西側は冷戦の終了を認めず、自分たちの影響圏を拡大しようとした（例：NATO、EU）
- 「欧米は冷戦勝利国として、ロシアを無視し続けた」
- 「ロシア社会は（第一次大戦後ドイツが味わった）『ワイマール症候群』を押し付けられ、恒常的に、偽善と欺瞞の気持ちを味わった」
- 「エリツィンからプーチン、メドヴェージェフまで、ロシアは欧州への統合による欧州共通空間の再フォーマット化（欧州安保条約、大欧州計画）を提案したが無視された」
- 「EUのウクライナへの拡大は見せかけだけで、加盟させるつもりはなかった」
- 「ロシアはウクライナを欧州影響圏に引きずり込むことは、人々の貧困と犠牲を招き、ロシアとの対立を確実にすると警告した」
- 「2012年から西側のプロパガンダ（政治宣伝）は強まり、ピークはソチ五輪だった」
- 「クリミアの編入は、西側が続けていた冷戦を完了させることだった」
- 「ウクライナが国家としての生命力があるのかどうか、確信がない」
- 「政府上層部はさらなるウクライナへの領土拡大を考えているかもしれないが、それは現実的ではなく、耐えられないほど高価なものになる」
- 「ロシアと欧州の同盟関係が樹立されれば、世界には、米国、中国に次ぐ第三の勢力が台頭し、世界の秩序はもっと安定したものになる」
- 「ロシアは近い将来、欧州への参入の希望を捨てるが、まだ反西側も反欧州へと傾く決定はしていない」
- 「始まったばかりで、すでに衰退を見せ始めている十年遅れのシベリア極東開発計画を通してのアジアへの経済展開が、クリミア問題に足をとられるとなると、ロシアの悲劇にもなる」

ロシアは冷戦後押し付けられてきたゲームの原則を変える。

「クレムリンは何を考えているのか？」
ルキン国際関係大学教授の説明

- （今回のウクライナ危機で、）モスクワは西側のルールを敢然と拒否した。
- ウクライナ危機の種は冷戦直後に植えつけられていた。
- ソ連崩壊後、西側には二つの選択があった。
- ①ロシアを西側体制に同化させる（ケナン）。②ロシアの影響圏をもぎ取っていく（クリントン、ブッシュ）。
- 結局、西側は後者を選び、東西ドイツ統一の際に、ゴルバチョフ大統領に示した「東方拡大はしない」との約束を破った。
- NATOは12カ国、欧州同盟は16カ国を新加盟国とした。
- ロシアは西欧主導の秩序に加盟するために、喜んで犠牲を払った。しかし、西側は冷戦時代のゼロサム・ゲームを続けた。
- クリントン・ブッシュ両米政権は、「ロシアは多極世界の中で、西側制度を拒否し、独立路線を歩むべきだ」と主張する者たちを勇気づける結果になった。
- 現在、西側の東方拡大は、モルドヴァ、グルジア、ウクライナなど、ロシア国境まで辿り着いた。
- 西欧を憧れる人たちと、ロシアとの伝統的紐帯を維持したいと考える人たちの間に、国家の中心を通る文化的な切断の分断をもたらした。
- NATOの脅威がクリミア半島まで到達した時、モスクワはもはや撤退する場所がないと決断した。
- ロシアの素早い動きに、西側が驚き、身を引いた。「ロシアはパートナーというよりは、敵国のような態度を取った」（ブリードラヴNATO欧州司令官）。
- ロシアは西側の包囲作戦に、最終的に、反応をするのは、時間の問題だった。
- その意味では、プーチン政権にとって、西側の抗議は偽善以外の何者でもなかった。
- アシュトンEU外相はウクライナの右派過激勢力組織「右翼セクター」への非難を行ったが、同組織のウクライナ権力奪取については何も言わなかった。
- 欧米はロシアをウクライナの領土を違反していると批判し続けているが、欧米はコソヴォ、セルビア、イラク、リビヤなどで、国家主権を破り、明らかに国際法に違反した。
- それでも、ロシアはウクライナでの連邦制度の導入と連合政権の樹立を提案しているが、受け入れないだろう。
- 西側こそが、何が良くて、何が悪いのか決定する能力があるというのだ。
- ロシアと欧米の差が拡大する中で、双方がウクライナで衝突するのは時間の問題だった。

ロシアと欧米がウクライナで衝突するのは、偶然ではなく、必然だった。

ウクライナ危機・英国の見方①

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎欧州が混乱した理由＜地政学レベル＞

★冷戦終了後、EUは欧州大陸を統一する『大欧州構想』の達成に失敗した。

★『大欧州構想』は、ゴルバチョフの『欧州共通の家』を土台に作られていた。

★代わりに、ブリュッセル中心の『拡大欧州政策』が登場した。

つまり、EU中心の欧州統合で、ロシアは排除された。

★つまり、冷戦の“非対称的な終結” だ。

★欧州は“新大西洋主義”に深くはめ込まれた。

EUとNATOの結合で、ロシアを排除する新しい力の配置だ。

冷戦後、「欧州共通の家」構想と「拡大欧州政策」が衝突し、
後者が勝利し、ロシアは排除された。

ウクライナ危機・英国の見方②

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎欧州が混乱した理由＜ウクライナ・レベル＞

★ウクライナの内部危機。ふたつの国家性（国家観）。
「ウクライナ人とは何か」という問題を誰が決めるかという争い。
ウクライナ一元主義VSウクライナ多元主義。

★＜ウクライナ一元主義の主張＞：
ウクライナの伝統的国家観はロシアなどの東スラヴ国家とは違う。
ウクライナは別の発展を行う。

★＜ウクライナ多元主義の主張＞：
ウクライナは異なる民族の複数文明共同体だ。
しかし、独立した主権国家・ウクライナに忠誠を誓う。
小ロシア主義的な多元主義の伝統から引き出された考え方。
大ロシア、小ロシア（小ロシア）、ベラルーシア（白ロシア）

ウクライナ危機では、ウクライナ国内の一元主義と多元主義が衝突した。

ウクライナ危機・英国の見方③
リチャード・サクワの英ケント大教授
（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎欧州は何をすべきか？

★われわれはウクライナの国内問題を理解するためには、**もっと多元主義的な考え方をとりいえるべきだ。**

同時に、欧州についても、多元主義的な考えをすべきだ。

★多極化した多元主義の欧州構想については、**もっと沢山の選択があるべきだ。**

★**冷戦終結後、ヘルシンキ会議2の開催が必要だった。**

欧州大陸が直面する挑戦に対し、ロシア、ハンガリー、トルコ、ウクライナなどの異なる平等な意見が必要だった。

◎ロシアの問題

★ロシアにとっての問題は、**「誰が異なる意見を持つ権利があるか」**ということだ。誰もが相手の見解を正統性がないと主張している。

つまり、**覇権主義的主張**VS**多元主義的現実**

冷戦終了、欧州安全保障の枠が身を決める「ヘルシンキ会議Ⅱ」が必要だった。

ウクライナ危機・英国の見方④

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎米露論争＝覇権国か、指導国か？

★指導国がキーワードで、別の者は覇権国という。

★米国は指導国（リーディグ・カントリー）として覇権を維持する。
米国は指導国として、自由で普遍的公共商品の流通を保証する。

★その一方、米国には、もっと暗い、帝国主義的な側面も持つ。
米国内では、自由な普遍主義と軍事的覇権主義の戦いが常にある。

★世界は変化しており、米国は他の指導国と分かち合わねばならない。
それが米国への挑戦となっている。

◎米露の冷戦？

★冷戦ではないし、周期的な対決でもない。

★もっと根本的な世界勢力の政治・経済シフトの反映だ。

★冷戦は過去の話であり、現在の紛争はもっと根本的に新しいことだ。

ウクライナ危機は新冷戦ではなく、もっと根本的な世界政治・経済の変化の反映だ。

ウクライナ危機・英国の見方⑤

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎ウクライナ危機への対処？

★誰もが譲歩することだ。

★クリミア抜きのウクライナ統合にロシアは関与する。

★西側も譲歩すべきで、ロシアの外交で何が起きているのか理解するための知的な枠組みが西側にできていない。

★ソチ五輪だけでなく、ウクライナ危機以前の２年間、非常に緊張した状況が続いていた。

★西洋主義者たち（リトアニア、英国、米国などのネオコン主義者を含む）は、現在の危機状態を利用している。

★西洋主義者は、「状況はもっと複雑だ」と説明する辛抱強い知的な仕事が必要だ。

★現時点では、危険な力構造が世界を支配しており、批判が欠如し、知的な挑戦がなされていない。

ウクライナの危機への対処は、誰もが譲歩することだ。

ウクライナ危機・英国の見方⑥

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎欧州の役割

★独は地政学的にウクライナ危機を解決する対話者になり得る。

★しかし、独はEU内部の影響力の強化を保証するために、連盟維持や大西洋共同体への忠誠がより重要となっている。

★独と露の間の特別な関係の時代は終わった。

★しかしながら、今日、ロシアはEU同盟内部で一緒に動ける者がいなくなったということではない。

★仏は潜在的な力を持っている。

★しかし、オランド大統領の力は国内では弱く、多くは期待できない。

★イタリアはロシアとの経済関係が強く、パートナーになり得る。

★その他いくつかの国が紛争から抜け出す道を探し出すことができるかもしれない。

★ウクライナ危機は欧州政治の恒常的な危機の源になっている。

★英国、リトアニアなどは和平を遠ざけ、危機を継続する当事者になり得る。

ウクライナ解決のカギは、欧州ではドイツとフランスが握っている。英国ではない。

ウクライナ危機・英国の見方⑦

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎ロシアの経済状況

★脆弱なロシア経済は制裁によって、さらに弱体化している。

★制裁はロシアのみならず、拡大した地政学的なユーラシアに緊張をもたらしている。

★ロシアは世界一の経済国ではないが、大経済国のひとつだ。

★世界のGDPの4%を占め、第8位の地位にある。

★1997年のアジア危機では、それほど大きくないタイの経済危機が東南アジア全体を巻き込んだ。

★ロシア経済の危機は、欧州および世界経済に壊滅的な効果をもたらす可能性がある。

ロシアが経済危機で崩壊すれば、欧州と世界は壊滅的な影響を受ける。

ウクライナ危機・英国の見方⑧

リチャード・サクワの英ケント大教授

（『ウクライナ最前線：国境地方の危機』の著者）

◎プーチン政権の行方

★プーチン政権は安全と生活水準をロシア国民に提供し、巨大な支持立を獲得した。

★プーチン体制は生き残る。しかしながら、プーチン政権は、その性格を変えざるを得なくなるかもしれない。

★プーチン体制は非常に複雑で、良い面も悪い面もある。

★危険なのは、過剰反応をして、連鎖反応を超す挑発をすることだ。ロシアは過剰な反応なしの静かな地位を保つべきだ。

◎米議会

★米議会が採択したウクライナ自由支援法は米露関係を悪化させる。

★ウクライナ危機の再現へと導く宣言だ。

★われわれは戦争直前の非常に危険な状況にある。政治家たちが頭を冷やすように論議を進めるべきだ。

ロシアが、そして、米国も、過剰反応をし、連鎖的は挑発行為をすることが一番危険だ。

中露関係の見方

「未来の世界：二極地経学？」 ドミートリー・トレーニン

（カーネギーセンター・ユーラシア・アウトルック、2014．12．28．）

★中国の研究者は(ロシアが主張している）多極化世界は近い将来に実現せず、非現実的だと思っている。

★世界は米国と中国の二つの極だけが存在する。他の国々はどちらの国と連盟するのか決めるべきだと説明する。

★この9ヶ月間に起きたことは、二極世界の成長を証拠づけている。

★ウクライナ危機は大欧州構築、もしくは、日本との戦略的パートナシップ関係を構築するというロシアの希望が終わったということだ。

★欧州連合はロシアとの関係を縮小し、日本の安倍首相はロシアとの戦略的関係を築くという考えを放棄するということになる。

★欧州と日本は、冷戦以前より、米国との結び付きを強め、ロシアは経済制裁に直面し、中国との関係を強化・拡大せねばならなくなった。

中国研究者によれば、「それ以外の道はない」となる。

⇒多極世界観のロシアと二極世界観に移行する中国の微妙なずれ。

中国はロシアを重要な国とは思っていない（重要なのは米国だ）。
そして、日本の外交戦略の幅は縮まっている。